

また会える いま会える

ウチのとうちゃん、どこ？

むかし、むかし、ある ^{ところ} 所 ^{ひとり} に一人のおばあさんがいました。

そのおばあさんは、まだ ^こ 子どもが ^{おさな} 幼いときに、 ^つ 連れ ^あ 合い (^{しゅじん} ご主人) に ^{さきだ} 先立たれます。

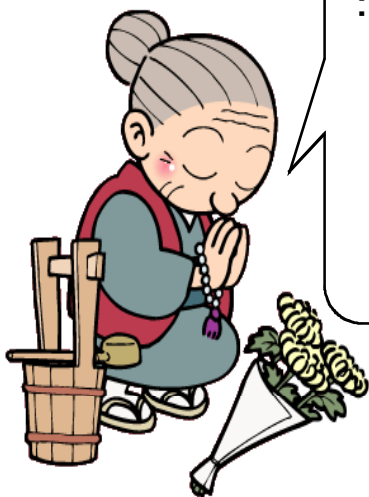
そして、そのことが ^{えん} ご縁 ^{てら} となって、 ^{まい} お寺 ^{ねんぶつ} にお参り ^{おし} するように ^{じょうど} なり、 ^{しんしゅう} お念仏 ^{おし} の ^{であ} 教え (^{じょうど} 浄土 ^{しんしゅう} 真宗 ^{おし} の ^{であ} 教え) に ^{であ} 出 ^{であ} 遇 ^{であ} われました。



そうか。
とうちゃんとは、この世限
りのご縁じゃなかった。
やがてまた、 ^{ほとけ} 仏さま ^{かなら} の ^{くに} 国
(^{じょうど} お浄土) で、 ^{かなら} 必ず ^あ 会 ^わ わ
せて ^い いた ^だ だけ ^る 。

そして ^{いま} 今も、 ^{ナンマンダ} ナンマンダ
ブ、 ^{ナンマンダ} ナンマンダ ^ブ の ^{ねん} お念 ^だ 仏 ^{ぶつ}
と ^{わたし} ともに、 ^{わたくし} 私 ^の ^{ところ} ところ ^へ へ
か ^え っ ^て っ ^き きて ^く くれ ^て いて ^い る [。] 。

ナンマンダブ…



と、 ^{ねんぶつ} お念仏 ^{ひぐら} の ^{おく} 日暮 ^{いっしょう} し ^お を ^お 送 ^ら れ、 ^お 一 ^{しゅう} 生 ^を を ^お 終 ^ら へ ^ら れ ^ま し ^た 。

お ^{じょうど} 浄土 ^う に ^う 生 ^ま れ ^た お ^お ば ^あ さん ^は は、 ^{なつ} す ^ぐ に、 ^{しゅじん} 懐 ^か しい ^ご 主 ^{しゅ} 人 ^{じん}
(^{とう} とう ^{ちゃん} ちゃん) を ^{さが} 捜 ^し ます [。] 。

しかし、ご主人の姿は、お浄土のどこにも見当たりません。

あれ、
おかしいな。
ウチのとうちゃん
は、どこにいるの
だろう…。
「ここで（お浄土
で）また会える」
と聞かせてもろう
ていたのに…。



ちょうどその時です。おりしも、阿弥陀さまが近くを通りかか
られました。

おばあさんは、矢も楯もたまらず、阿弥陀さまの袖を引っ張っ
てたずねます。



あ、あのう、
阿弥陀さま、
ウチのとうち
やんは、
どこにいるの
でしようか？

おばあさんの問いかけに、阿弥陀さまはニッコリと微笑んでお
っしゃいました。

ばあさんや、
アレ（とうち
やん）はね、
ワタシだった
んだよ



はなし きんじょ せんぱいじゅうしょく き
こんなお話を近所の先輩住職さんが、お聞かせください
ました。さて、これはいったい、どういうことでしょうか？

あみだ
ウチのとうちゃんが「阿彌陀さまだった」ということは、
あみだ すがた
「阿彌陀さまが『ウチのとうちゃん』という姿となって、は
たらいていてくださっていた」ということになりますね。

さきだ こ みちび
先立つ子に 導かれ...

へいあんじだい じょりゅうかじん ゆうめい いずみしきぶ まなむすめ
あの平安時代の女流歌人として有名な和泉式部は、愛娘
さきだ いずみしきぶ まなむすめ な とき きも
に先立たれています。和泉式部は、愛娘を亡くした時の気持
こか たく なげ
ちを古歌に託して、嘆かれたといひます。

かえ
帰
り
こ
よ
か
し
みちし
道
知
れ
ぬ
と
て
しで
死
出
の
旅
たび
ゆ
た
ど
り
行
く
ら
ん
こ
子
は
死
に
て



な こ おも しんぱい おやごころ うた
まさに亡き子を思い、心配する親心 いっぱいの歌です。

いずみしきぶ ほとけ おし ぶつきょう であ
ところが、その和泉式部が、仏さまの教え（仏教）に出遇
うた か
って歌が変わります。

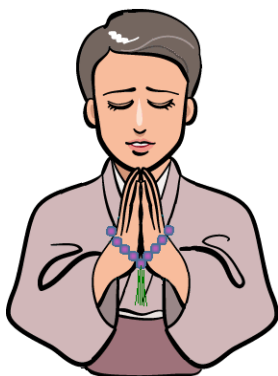


ゆめ
夢
の
世
に
あ
だ
に
は
か
な
き
み
身
を
知
れ
と
おし
教
え
て
帰
る
かえ
こ
子
は
知
識
な
り
ちしき

この「子は知識なり」の「知識」とは、仏教語で「正しく導いてくださる方」という意味です。

つまり、「先立った我が子が、自分の命をかけて、『お母さんの人生、大切に生き抜いてください』と教えて、仏さまの国（お浄土）へ帰っていった」と歌を詠んだのです。

母さん、これでも
わからないの？
いつ終わるか分
らないのが、命
なのですよ。
必ず迎えなけれ
ばならない死があ
るのです。
だからこそ、大切
に生きてください。



和泉式部は、愛娘の死を通して、「よその子が死んでも、他人事にしか思わないこの私のために、今あの子は、私の子として生まれ育ち、先立って、真実を教え知らせようとしてくれた仏さまだった」といだけられたのです。

「うちのとうちゃん」も、おばあさんのご主人として連れ添い、苦楽を共にした日々を経て先立ち、おばあさんをお念仏の教え（浄土真宗の教え）に遇わせて、お浄土へと導いてくださった『おばあさんにとっての仏さま』だったのです。

「よそのとうちゃん」なら、こうはいきません。

わ い が い みな わ ぼ さ つ
我れ以外、皆、我が菩薩なり

いま しょうど おうじょう
今、このことを「お浄土に往生した
あと い とき
後ではなく、生かされているこの時に
き い み
聞かされたことに意味があるのだ」と
わたし おも
私は思います。

あみだ なもあみだぶつ
阿弥陀さまは、南無阿弥陀仏のおよび
ごえ とき
声となって、そして時には、「さまざ
ひと ぼさつ くのお
まな人」や「菩薩」となって、苦悩の
しゅじょう すく
衆生を救ってくださいます。

わたし すがた
それは、私にとって「やさしい姿」であることもあれば、
とき きび すがた にく
時には「厳しい姿」であったりもします。あるいは「憎まれ
やく わたし しんじつ みちび そだ
役」になって、この私を「真実に導き、育ててくださる」
こともあるでしょう。

しんらん しょうせつ なだか さっか よしかわえいじし わ い が い
『親鸞』の小説で名高い作家の吉川英治氏は、「我れ以外、
みな わ し い ねんぶつもう じんせい
皆、我が師なり」と言われたそうですが、お念仏申す人生では、
わ い が い みな わ ぼさつ
「我れ以外、皆、我が菩薩なり」といただくことができるでしょう。

な ひと えん ぶつぼう あ あ せかい
亡き人をご縁に仏法に会うとき、また会える世界があること
し であ
を知らされます。いや、「すでに出会っていた」のでした。

いま わたし いっしょ
そして今、『ナモアミダブツ』となって、私といつも一緒に
あゆ
歩んでくださっているのです。

じんせい まく お しょうど おうじょう
やがて、人生の幕が降り、お浄土へ往生させていただいた
あみだ
とき、阿弥陀さまがおっしゃってくださるのでしょうか。

『アレはね、ワタシだったのですよ』と。

